

Title	天台宗における模刻の意義： 比叡山延暦寺根本中堂の薬師如来立像を中心に
Sub Title	The significance of reproductions within the Tendai sect : the Yakushi image at the Konpon Chū-dō of Enryakuji Temple on Mt. Hiei
Author	西木, 政統(Nishiki, Masanori)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2021
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.148 (2021. 10) ,p.213- 249
JaLC DOI	
Abstract	Yakushi Nyorai is widely known for his power to heal the sick and images of him are found at numerous temples in Japan. When exploring the spread of Yakushi images in Japan, one should not overlook the Tendai Sect and its founder, Saichō. He worshipped Yakushi Nyorai and carved an image of him at the Konpon Chū-dō of Enryakuji Temple (hereafter referred to as the "Konpon Chū-dō image"). The worship of this image spread throughout Japan by means of replicas. In this paper, I surmise the form of the original Konpon Chū-dō image, which is now lost, through textual sources, and also analyze the images thought to be its replicas. I believe the original image's characteristics included a height of approximately five shaku and five sun (about 166 cm) as well as red clothing and a gold body. However, there has been disagreement about its mudra since the medieval period. Although recent scholarship has determined this mudra, in this paper I focus on replicas with a different mudra and their variations, arguing that these variations helped the worship of Yakushi to thrive.
Notes	特集：林温教授 退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000148-0213

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

天台宗における模刻の意義

——比叡山延暦寺根本中堂の薬師如来立像を中心に——

西 木 政 統*

The significance of Reproductions within the Tendai Sect The Yakushi Image at the Konpon Chū-dō of Enryakuji Temple on Mt. Hiei

Masanori Nishiki

Yakushi Nyorai is widely known for his power to heal the sick and images of him are found at numerous temples in Japan. When exploring the spread of Yakushi images in Japan, one should not overlook the Tendai Sect and its founder, Saichō. He worshipped Yakushi Nyorai and carved an image of him at the Konpon Chū-dō of Enryakuji Temple (hereafter referred to as the “Konpon Chū-dō image”). The worship of this image spread throughout Japan by means of replicas. In this paper, I surmise the form of the original Konpon Chū-dō image, which is now lost, through textual sources, and also analyze the images thought to be its replicas. I believe the original image’s characteristics included a height of approximately five *shaku* and five *sun* (about 166 cm) as well as red clothing and a gold body. However, there has been disagreement about its mudra since the medieval period. Although recent scholarship has determined this mudra, in this paper I focus on replicas with a different mudra and their variations, arguing that these variations helped the worship of Yakushi to thrive.

* 東京国立博物館研究員

はじめに

日本彫刻の歴史においては、しばしば模刻が造られてきた。すぐ思い浮かぶのは、ある有名な作品を手本として模刻する場合である。どの作品をどのように模刻するかは、仏師の好みや注文主の意向など、さまざまな要因が考えられる。いずれも、参照された原像の姿と模刻の姿は、「似ている」と想像されることが一般的である。もちろん、実物を前にして模刻できたとは限らない。紙などによる図像を介して写すこともあれば、像内への納入品や銘記によって、原像を意識させることもあった。

ごく一部の特徴を写すことで、原像を想起させる模刻も少なくない。古来信仰を集めたのは、京都・清凉寺の釈迦如来立像（図3）や、奈良・長谷寺の十一面観音菩薩立像、長野・善光寺の阿弥陀三尊像といった、いわゆる靈験仏である。いずれも頭髪や着衣、印相など一部の特徴によって、原像を想起できる模刻が数多く知られる。さまざまな模刻を介して、各地に信仰が伝播したのである。先行研究¹を参考に模刻についてまとめれば、原像の外見的特徴を写すことによって、靈験や由緒といった原像の価値を移植するものと捉えられる。模刻という行為において重要なのは、価値を移すという目的であり、造形的な忠実さは程度によって異なると理解できよう。そのため、今日の模写・模造の観念では認めがたいが、立像を坐像に変更する、ということもありえた。

なかでも、模刻の事例として本稿で注目したいのは、伝教大師最澄（766／767～822）の自刻と伝えられる薬師如来立像である²。最澄が比叡山に開いた延暦寺の根本中堂本尊（以下、根本中堂像と呼ぶ）で、いくたびもの火災によって、当初の本尊像は秘仏のうちに失われたものの、宗祖ゆかりの靈像として信仰を集めてきた。天台宗を背景とする環境で造立され、根本中堂像を意識するような特徴を備えた薬師如来像の存在も数多く指摘される。これらは「天台系薬師」と呼ばれ、各地で天台宗の教線拡大に果たした役割が明らかになりつつある。ただし、古くからその像容に異

説が生じたこともあり、天台系薬師としての条件を規定するのはむずかしい。議論のある印相はともかくとして、法量を五尺五寸とする立像で、朱衣金体という、袈裟を朱色に、肉身を金色に表わす点などは、根本中堂像の特徴として広く認められるが、模刻がそうとは限らない。

そこで、本稿ではあらためて根本中堂像の姿を伝える史料を整理し、異説も含めた造形的な特徴を明らかにする。そこから、根本中堂像を意識して製作された可能性の高い遺品を挙げ、天台系薬師のバリエーションについて検討を行う。最後に、同じ天台宗のなかで知られる模刻例の特色にも及びたい。

1. 根本中堂像の歴史的意義

まずは、最澄自刻と伝えられる根本中堂像の歴史と沿革について、簡単に触れる。『叡山大師伝』などによれば、延暦4年(784)、比叡山に入った最澄が草庵を結び、同7年(788)に虚空蔵尾の倒木で薬師如来像を「自刻」、薬師堂(のちの根本中堂)を創建したという。ただし、その時期は後述の『天元三年中堂供養願文』や『三宝絵』など、唐からの帰国後、延暦24年(805)とする説もある。その後、承平5年(935)、元久2年(1205)、文永元年(1264)、建武2年(1335)など、幾度も火災に見舞われ、いずれも救出されたとみられるが、ついに永享7年(1435)には薬師如来像も焼失したという。文安5年(1448)に新造された再興像も、明応8年(1499)、元亀2年(1571)とつづく兵火によりふたたび焼失した。現在の像は、岐阜・横蔵寺からもたらされたものと伝えられるが、天正年間(1573~1592)に再興されたころのものと考えられている³。

ところで、根本中堂の本尊像として、また天台宗の中心的な尊像として担った特質は、おもに3点を挙げることができる⁴。

①最澄の自刻像

②戒律の護持

③像法転時の救済

①について、数多い高僧自刻伝承のうち成立が早いものとして注目される⁵。たとえば、仁和2年(886)の『太政官符』(『類聚三代格』所収)には「(最澄)すなわち薬師仏像を造り、東塔院に安んず⁶」とあり、ここでは作者か願主かの区別がつかない表現である一方、天元3年(980)の『天元三年中堂供養願文』では「巧手の人を請わず、(最澄)自ら等身の像を造る⁷」とあるため、積極的に最澄の関与を主張する表現といえる。また、永観2年(984)の『三宝絵』では「(最澄)手つから中堂の薬師如来の像をつくり⁸」とあり、10世紀ごろにはこのように周知されていたものとみられる。

同様に、早い時期には②との関わりも注目される。たとえば、最澄の高弟が記した『伝述一心戒文』(9世紀)には「中堂薬師仏は、二人の年分を持ち、これを永代の基となす。この仏像の前にて年分を試すべし⁹」とあるように、天台宗に認められた年分度者2名は、根本中堂像に仮託されたものであった。さらに、戒壇堂が建立されるまでは薬師如来像の前にて授戒儀礼が行われていた(『慈覚大師伝』[10世紀]など)。こうした戒律との関わりについては、そもそも薬師經典において戒律の護持が約束されることにくわえ、最澄と同じ時期に活躍した僧善珠(723~797)の『本願薬師経鈔』に、戒律を守ることで鎮護国家が果たされると理解されていることから、同時代の流行としても認められる。

ところが、末法が近づくと考えられるにつれ、次第に③の側面が重んじられるようになる¹⁰。最澄は、みずからの生きた時代を末法を控えた像法の時代と認識していたが(『守護国界章』[弘仁年9年・819])、薬師經典に説かれたように、薬師如来は像法における救済を約束する仏でもあった。ここで思い起こされるのは、『三宝絵』には「像法の時を救いたへ」とあっ

たことである。これについては、末法をめぐる信仰のなかで注目された側面もあるが、最澄の時間認識とも矛盾しない。

このように、根本中堂像は早くから秘仏でありながら、時代を経るにつれさまざまな側面が人々の信仰を集め、天台宗でもっとも注目されてきた尊像であることが、のちに多様な模刻が造られる背景になったと考えてよいだろう。

2. 史料に見られる姿と異説

根本中堂像は、秘仏のうちに焼失したため、その姿については必ずしも明らかではない。文献上の記述（史料①～⑪）によって、いま一度これを整理してみよう。

- (1) 法量 等身または五尺五寸（約 166 センチ）
- (2) 像の姿勢 立像
- (3) 表面仕上げ 朱衣金体（着衣＝朱 肉身＝金色または漆箔）
 - *当初は素地仕上げで、弟子の義真による彩色か（史料⑧）
- (4) 印相 諸説あり
 - ①施無畏・与願印（史料①②）
 - ②智吉祥印（史料③）
 - ③初門釈迦印（史料④）

まずは、五尺五寸程度とする大きさで、もとは素地仕上げの立像であったことから、京都・神護寺像（8～9世紀）（図11）など、同時代の薬師如来像に多い姿といえる¹¹。しかし、印相については諸説ある。古くから事相書において知られていたのは①施無畏・与願印である。たとえば、『覚禅鈔』（史料①）には「恵什云く（中略）中堂薬師。右掌を揚げて左掌を垂れる」とあり、代表的な事相家である恵什（12世紀ごろ）のことばとし

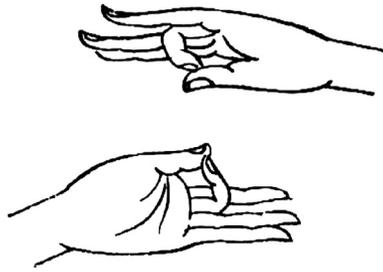


図1 智吉祥印

て引かれる。一方、天台の事相書である『阿婆縛抄』（史料②）でも、「秘説云く、中堂薬師は施願無畏なり、忠師、親しくこれを見奉る」としており、台密の高僧である忠快（1162～1227）の実見として伝えられた点が留意される。

ところが、同様に天台僧が実見したと伝えられる異説が他にも2種ある点が問題となる。ひとつは、法勝寺上人の恵鎮（1281～1356）や南谷南陽房幡州堅者（播磨房の成忍か¹²）らが目にしたという②智吉祥印であり、もうひとつは天台座主を務めた慈円（1155～1225）が実見した③初門釈迦印である。

まず、②智吉祥印について、これは光宗（1276～1350）のまとめた『溪嵐拾葉集』（史料③）にみえるもので、「左手を仰て掌中を凹みて横に胸上にこれを置くなり。右手は大指をもって中指辺を捻じ、少し深く違たるなり。右手を左印の掌に相近づけたる事五六寸ばかりなり。梵匟印のごとくなり。これ即ち智吉祥印なり。報身説法印なり」とする（図1）。建武2年（1336）12月7日の火災時、虚空蔵尾彼岸所へ移安された諸仏を、恵鎮らが検分に臨んだ際の記録という¹³。

つぎに、③初門釈迦印だが、慈円の口伝を慈鎮が記した『四帖秘決』（史料④）のなかで、「中堂本尊を拝見するに奇異の事あり。印相を見るに初

門釈迦の印なり。右の御手は大指をもって中指の甲のそばを捻じて、小指、水指は頭指これを立てたり。左の御手はただ御袖より指を出して、臂を身に付けて掌を仰ぎて、五指をのべて（ただしややこれを屈す）、指の先を直に前の方へ向たり。初門の印は、左手は横に心に置く。これはしからず。ただ指し出したるままにて指をのべたり。右の御手は、事の外上にあげて肩にひとし」であったという。元久2年（1205）12月2日の火災により、随自意堂へ移された諸仏について、慈円らが検分に及んで確認したものである。

従来は、①施無畏・与願印説を支持する研究者が多く、②智吉祥印説が知られるばかりであった¹⁴。のちに津田徹英氏¹⁵が③初門釈迦印とする記述を見出され、これが実見の状況からもっとも信憑性の高いものと判断できる。ただし、①②説については「誤伝」の例として挙げられることもあるが、果たしてそう断じてよいものであろうか。

この点について、近年、井上一稔氏¹⁶が②説をめぐり注目すべき見解を提示した。井上氏は、特異な印相で知られる京都・勝持寺の薬師如来坐像（13世紀）（図2）を取りあげ、智証大師円珍（814～891）まで遡る釈迦根本印であること、天台教学における釈迦薬師同体説のなかで、薬師如来として表わされたと論じた。この左手は膝上で第一・三指を捻じて薬壺を乗せ、右手は胸辺で掌を下に向け、やはり第一・三指を捻じるという印相はかねて智吉祥印の実例として認識されてきたが¹⁷、これがもともと智手である右手の印を指し、のちに両手の印が含まれるなど、複雑な成立背景をもつ釈迦印のひとつであることを明らかにした。

興味深いのは、②説はまさにこの勝持寺像に酷似した印相であることで、井上氏は「慈円の実見以降に恵鎮の実見したような印相に根本中堂薬師如来像が改変されていたか、あるいは新造されていたかとか考えようがなかろう¹⁸」と述べた。たしかに、②③の両説を重くみれば、そのように考えざるを得ない。ともに右手は第一・三指を捻じ（②説の左手もそう



図2 薬師如来坐像 勝持寺

であった可能性がある), ③説は本来なら左手を横にして胸に置くべきだが, そうではないという. これは②に近いかたちであり, 慈円の認識にしてみれば, ③初門釈迦印とは, 本来のかたちは②智吉祥印であった¹⁹.

しかし, 井上氏が指摘したように, ②は円珍の時代以降に現われる印相であり, 最澄自刻を称する根本中堂像の本来の印相とはいえない. 津田徹英氏²⁰は, このほど根本中堂像の姿を論じるなかで勝持寺像にも言及し, その関連を認めたとうえで, 根本中堂像の姿を再現するのではなく, 智吉祥印という認識に立ちながら表わされたと考察し, 根本中堂像が智吉祥印と記されたことについては, 天台事相としての昇華と解釈した.

とりわけて, ②説と③説は, 研究史上に注目された順に紹介したが, 時系列で挙げれば元久2年(1205)に③説が, 建武2年(1336)に②説が確認されたことになる. 当初の根本中堂像が失われた現在, 事相的な解釈とその歴史的な事実関係については, 確かめられないといわざるを得ないが,

次章以降にみるごとく、むしろさまざまな説に対応する薬師造像があったこと自体が重要であろう。

3. 「天台系薬師」の分類

以上、根本中堂像の姿について考えをめぐらせてきたが、残念ながら製作当初の像は今日に伝わらない。しかし、模刻とは明言されないものの、根本中堂像によく似通う姿の薬師如来像が、ほかでもない根本中堂内に2躯あったことに注目したい（史料⑤～⑪）。

ひとつは延暦寺俗別当の大伴国道（768～828）を願主とし、第四代天台座主である安恵（805～868，864～868 在任）を作者とする像である。法量を「五尺」ないし「五尺三寸」とし、「身金色衣文彩色」すなわち朱衣金体の姿であったという。印相は施無畏・与願印である。もうひとつは、第六代天台座主の惟首（826～893，892～893 在任）を作者とする像で、同じく「五尺五寸」ないし「五尺三寸」の大きさで、表面仕上げは「身金色衣文彩色」とする。やはり印相は施無畏・与願印のようだ。製作年は貞観元年（859）と伝えられる（史料⑧）。安恵は、これまで教学主導者としての側面が強かった天台座主職を、事務統括者として確立した人物であり、大伴国道は、最澄生前からの檀越で、大乘戒壇設立にも尽力した実務官人であった²¹。ともに最澄の事績を意識するところから、根本中堂像の模造に至ったのだろうか。惟首の像とともに、願主ではなく作者として天台座主をあてるのも、最澄自刻を意識しての記述といえよう。

根本中堂には七仏薬師像7躯とあわせて10躯の薬師仏があったことになるが²²、これは根本中堂像がもつ求心力の強さを証するものであろう。注目したいのはその姿であり、9世紀中には安置されていた先述の2躯が、従来認められてきたとおり、根本中堂像を意識していることは確かだろう。願主を明らかにしないとはいえ、七仏薬師像が施無畏・与願印であるのも、これら一連の薬師造像との関わりを補強すると思われる²³。

ここで問題となるのは、これらがすべて施無畏・与願印と伝えられる点である。南都の薬師造像ではこの印にして薬壺を持たない例があることを踏まえ、歴代の事相家が注目したが、智吉祥印や初門釈迦印といった信憑性の高い異説をみるに及び、誤伝とされることが多くなった。誤伝との見方は、智吉祥印を説く『溪嵐拾葉集』（史料③）から確認できる。たとえば、「御厨子の外、戸帳内の左右、二尊これあり。その仏の印相なり。これ別の仏なり。この事、本仏を拝見せざる者か」という。ここにいう「別の仏」は、御帳内に安置されていた伴国道発願像および惟首発願像であろう²⁴。両者は、その大きさや彩色など、根本中堂像に倣った一種の模像と考えられ、この現存しない「二尊」が、光宗のいうとおり施無畏・与願印であり、誤認されて伝わったなら理解しやすい²⁵。

しかし、なぜ模刻と思われる両像が施無畏・与願印であったのか。松浦正昭氏²⁶や奥健夫氏²⁷が指摘したように、根本中堂像が優填王思慕像と同一視された可能性がある。優填王思慕像とは、釈迦の在世中にインドの優填王が造らせた仏像で、釈迦本人もその出来栄を認めたという、伝説の霊像である。その模刻とされる清凉寺像（図3）は、根本中堂像と同じく表面を朱衣金体とし、施無畏・与願印をとる等身の釈迦如来立像である。根本中堂像が朱衣金体にされたのは初代天台座主である義真（781～833）の代と伝えられるが、この時点で根本中堂像を優填王像とみなす土壤があったことになり、その印相は釈迦如来像に多い施無畏・与願印である方が望ましかろう。智吉祥印及び初門釈迦印とも、ともに本来は釈迦の印相であることに注意したい。根本中堂像の解釈にあたり、天台宗で重んじられた法華経の教主である釈迦如来が強く意識されたことは明らかで、東塔・根本中堂の薬師如来と西塔・釈迦堂の釈迦如来²⁸を同一視する釈迦薬師同体説が生まれる所以ともなる²⁹。

さらに、確実な模刻例に比叡山実相院の薬師如来坐像（康平6年〈1063〉）がある。後冷泉院（1025～68）を願主とし、第三十二代天台座主の明快



図3 釈迦如来立像 清涼寺

(985~1070) が造立したと伝えられるこの像は、「中堂本仏を写し奉る」(『阿婆縛抄』, 史料②) と記されるため、いわゆる「天台系薬師」であったことが知られる。ところが、その姿は「金色半丈六³⁰」(『扶桑略記』), 「金色薬師像一軀、[居高四尺]³¹」(『山門堂舎記』) と記録される。印相は施無畏・与願印で、もともと持物をもたなかったようだが、人々の求めによって宝珠を備えたことがわかる(史料②)。11世紀には実際の姿と伝えられるところとまったく異なる姿の模刻があったのである³²。

以上のように、現存作例に乏しいとはいえ、文献の記述から考えるならば、最澄自刻と伝えられる根本中堂像を意識した薬師如来像が同じ根本中

堂内にあり、「写し」と明言されるものの、その形姿は根本中堂像と大いに異なる模刻があったことになる。ここから、大きさや表面仕上げ、印相などによって根本中堂像を想起させるものと、坐像などに表わされた異形像、それぞれ下記のように模刻の特徴が浮かびあがる。

- ① 施無畏・与願印
- ② 智吉祥印を意識したかたち（左手首を内側に曲げる）
- ③ 初門釈迦印に近いかたち（左肘を前方に曲げる）
- ④ 異形（金色、坐像、法量の拡大など）

①から③までは、立像として表わされ、等身ないし五尺五寸ほどの大きさで、朱衣金体（着衣部に赤系の彩色を施し、肉身部を金色ないし漆箔仕上げとする）、あるいは当初の姿を意識して素地仕上げの檀像風であることを基本とする。そのうえ、印相の諸説にあわせると、このように分類できるだろう。もちろん、いずれの場合も伝来が天台寺院に関係することは欠かせない。

たとえば、まず①においては奈良・室生寺金堂像（伝釈迦如来）（9世紀）（図4）を代表として挙げたい。研究史上、はじめて根本中堂像に倣う像の存在を指摘したのは毛利久氏³³だが、伝釈迦如来像を取りあげて、すでに指摘のあったとおり薬師如来として信仰されていたことを認めたい。その印相が施無畏・与願印であり、衣を朱色に彩色し、いわゆる朱衣金体となること、そして天台僧だった円修の関与を想定できることから、根本中堂像を模して製作された可能性を指摘した。毛利氏はこれ以外の作例に言及せず、あくまで室生寺の問題として考えたようだが、その後も天台系薬師として広く認められてきた³⁴。他にも、手首先を後補とすることが多いとはいえ、もと施無畏・与願印であったことが想像される作例は多く、根本中堂内にあった2軀の薬師如来像に続くものといえるだろう。



図4 伝釈迦如来立像 室生寺金堂

次に、②については、智吉祥印そのものを表わす遺品は乏しく、京都・勝持寺像（13世紀）（図2）を除いては知られない。しかし、なかには左手を胸前に据える、ないし手首先を腹前に曲げる像が少なくないことも注目されてきた。大阪・獅子窟寺像（9世紀）や、兵庫・栄根寺像（同）を古例として、滋賀・西教寺像（13世紀）（図5）や千葉・東禅寺像（同）（図6）が知られるが、いずれも坐像である。一方、立像のなかで注意したいのは、左手首先を内側に曲げるものである。奈良・室生寺金堂像³⁵（9～10世紀）（図7）をはじめ、東京・寛永寺像（同）（図8）、京都・長源寺像（10世紀）（図9）などがある。後補が多く、施無畏・与願印を改めた例が



図5 藥師如来坐像 西教寺

混在することに注意は必要だが、本来手首先を曲げる必要はない以上、その背景には智吉祥印への意識があるにちがいない。

なかでも、とりわけ注目したいのは寛永寺像である³⁶。天台の古刹である滋賀・石津寺伝来と判明し、元禄11年(1698)の寛永寺根本中堂建立に際して慈眼大師天海が本尊として請来した。現在、三尊を構成する日光・月光菩薩立像は、やはり東北の天台寺院を代表する山形・立石寺からもたらされた。比叡山の再現を意図して開創された東叡山寛永寺の本尊像を探し求めた際に、由緒も重んじられたことは想像に難くない。寛永寺像は、台座蓮肉部まで一材より彫出し、その両肩をいからせた造形は、一木であることを強調するかのようである。根本中堂像と同木から彫られたという兄弟仏の伝承も、故なきものではない³⁷。

なお、京都・長源寺像については、清水善三氏³⁸による一連の研究が



図 6 薬師如来坐像 東禅寺

注目される。清水氏は、長源寺像を取りあげて「天台薬師像」と称したうえ、その造形を以下のように分類した。「肉髻と地髪部を明瞭に区別せず」、「髪際線をまぶかにかぶる頭髪の形式」であり、「細い三日月形の眼形」で、「翻波をつくらず、角のある山形の稜線をきざむ太い髻の形式」であるとし、この形式に該当する作例は「十世紀中葉以降、十一世紀初頭にかけて」「薬師像が多く」「天台系寺院を中心として造立」されたものと総括した。これは、天台系薬師像を造形によって細かく規定する、はじめての試みとして重要だが、のち清水氏自身³⁹が再考されたように、頭髪や衣文といった様式については、根本中堂像のような特定の薬師像ではなく、「円仁・円珍時代の彫刻」全般が該当することを考慮すべきである。その後、高梨純次氏⁴⁰も、このようにいわゆる「天台系薬師」は、阿弥陀如来なども含む「天台宗の如来形立像」と置き換えられるとした⁴¹。

また、③は慈円が目にしたように、左手を前方に屈臂したものを指す。



図7 薬師如来立像 室生寺金堂

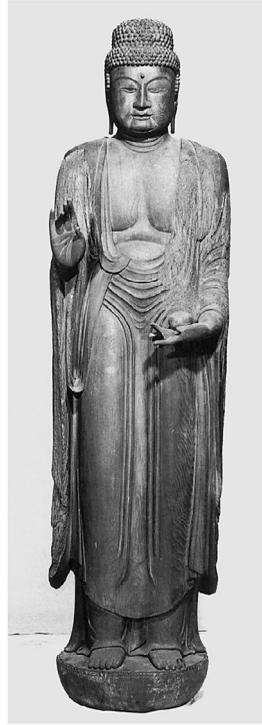


図8 薬師如来立像 寛永寺

その代表といえるのは、京都・法界寺像（永承6年〈1051〉ごろ）（図10）である。ただし、左手を屈臂する薬師如来像は、京都・神護寺像（9世紀）（図11）をはじめ平安時代に多いため、モデルの像を特定するのはむずかしい。とはいえ、たとえば千葉・福秀寺像⁴²（承久元年〈1219〉）（図12）は、堂々とした量感やY字形の衣文表現から、平安時代の造立と見まがうような作だが、像内銘により鎌倉時代の製作と判明する。模範となった先行例の存在を想定するなら、根本中堂像は有力な候補である。

法界寺像については、西川杏太郎氏⁴³がその紹介論文において指摘し



図 9 薬師如来立像 長源寺



図 10 薬師如来立像 法界寺

たように、根本中堂ゆかりの三寸の薬師像を納めたものとして、永承6年(1051)に造立されたとみられる。ここに、左手を屈臂し、素地に切金を施し檀像風に仕上げた像が表わされたことは重要である。西川氏によって「叡山の根本薬師像の伝統を襲う天台系薬師像」として規定されたのは、「天台系寺院に所在する薬師如来像」のうち「一木彫成」にして、「素地仕上げ(檀像)」または「白土地彩色」の「純木彫風」のもので、とくに奈良・室生寺金堂像(伝釈迦如来)と、東京・寛永寺像を代表作とされたのはまさに慧眼であった。なお、この左臂を屈する系統は、鎌倉時代以降も再流行する⁴⁴。



図 11 薬師如来立像 神護寺



図 12 薬師如来立像 福秀寺

最後に④の異形について、既に紹介した比叡山実相院像をその典型として、現存作例においても候補となる像がいくつか知られる。たとえば、滋賀・善水寺像（正暦4年〈993〉）（図13）、京都・六波羅蜜寺像（貞元2年〈977〉以降）（図14）、「西の比叡山」とも称される兵庫・円教寺に伝来した滋賀・舎那院像（11世紀）がある。その根拠として重要なのは善水寺像である。本尊の薬師如来坐像の他、同時期に製作されたと考えられる梵天・帝釈天立像、四天王立像、聖僧文殊坐像などが伝えられるが、宇野茂樹氏⁴⁵はこの尊像構成から、天元3年（980）当時の根本中堂に安置され



図 13 薬師如来坐像 善水寺

た諸像の再現である可能性を指摘した。たしかに、治安2年(1022)に藤原道長によって十二神将像が、次いで永承7年(1052)に藤原頼通によって日光・月光菩薩像が奉納されるまでは(史料⑥～⑨, ⑪), 複数の薬師如来像を除き, 根本中堂には梵天・帝釈天像と四天王像, そして聖僧文殊像しかなかったため, この推測は妥当と思われる。

一方, 坐像で表わされた背景について, 宇野氏は「立像・坐像の異りはあるにせよ」とするに留めたが, のち津田徹英氏⁴⁶がこの問題に取り組み, 根本中堂像の印相が「初門釈迦印」として理解されるなかで, この印相が比叡山西塔釈迦堂本尊である釈迦如来坐像と同一であったことから, 「金色」の「坐像」とする天台系薬師には, 釈迦堂本尊のイメージが投影されたと考察した。こうした天台教学も坐像形式が生まれた背景のひとつといえようが, 濱田隆氏⁴⁷が注目したように, 天台大師智顛⁴⁸(538～597)以来, 一般的には禅定や説法の場面を表わす仏の姿としては坐像が重視さ



図 14 薬師如来坐像 六波羅蜜寺

れたのも事実である。あえて坐像が選択された理由については、他にも個別の事情なども考慮して判断すべきと思われる。

以上のとおり、典拠によってさまざまな姿の天台系薬師像が想定されることをみてきたが、いまこれに該当する作例を集めてみると、立像で 100 躯近く、また坐像でも 80 躯ほど数えることができる。各像については個別に背景の検討を行いながら慎重に判断する必要があるため、一覧として提示することは控えるが、まずは以上に挙げた形姿が基本となることを確認しておきたい。

おわりに

本稿では、根本中堂像の模刻、すなわち天台系薬師像について、原像の基本情報を確認したのち、そこから生じるさまざまな異説を踏まえて多様な模像が展開したことをみてきた。最後に、なぜ模刻が必要とされたの

か、その役割について考えたい。

まずは、「最澄自刻」という、天台宗における正統性の保証が挙げられる。これには最澄個人の薬師信仰も意識される筈である。次に、天台の中核寺院としての比叡山を再現する意図もあろう。従来指摘されるように、滋賀・善水寺や兵庫・円教寺、山形・立石寺、東京・寛永寺では、根本中堂を意識して本堂を建立することで、各地の疑似比叡山として機能した可能性がある。つまり、宗祖である最澄や比叡山をしのぶものとして、こうした天台寺院に薬師如来像が造立されたという推測が成り立つ。

天台寺院の本尊としては、阿弥陀如来、観音菩薩に次いで薬師如来が多い⁴⁹。さまざまな尊像が挙げられるのは、天台宗では特定の本尊を定めないためだが、たとえば阿弥陀については、そもそも浄土教信仰が比叡山から始まったこと、常行堂の阿弥陀信仰や宝冠阿弥陀など、天台とのゆかりが思い出される。観音は横川中堂の本尊であることと無関係ではないだろう。そうであれば、薬師如来についても、根本中堂の本尊が薬師如来であること、ひいては最澄の薬師信仰に由来するものといえよう。

本稿を結ぶに際して、天台宗における模刻について付記しておきたい。これまで天台系薬師を対象に考察してきたが、他に明瞭な模刻の事例がある。ひとつは、慈覚大師円仁（794～864）が比叡山常行堂に造立した阿弥陀如来立像である。京都・真正極楽寺（真如堂）の阿弥陀如来像⁵⁰（正暦3年〈992〉ごろ）（図15）は、その模刻と考えられ、さらにこれを鎌倉時代に忠実に模刻した例が京都・大念寺像⁵¹（仁治4年〈1243〉）（図16）である。細部まで酷似した模刻の存在により、真正極楽寺像もまた円仁ゆかりの原像の模刻であることが想像できる。

また、近年奥健夫氏により見出されて注目を集めたのは、恵心僧都源信（942～1017）が表わした地藏菩薩立像の模刻である⁵²。京都・清凉寺像⁵³（承久3年〈1221〉）、同・寂光院像⁵⁴（寛喜元年〈1229〉）、ドイツ・ケルン美術館の地藏菩薩像⁵⁵（建長元年〈1249〉）（図17）に見られた納入品の種



図 15 阿弥陀如来立像 真正極樂寺（真如堂） 図 16 阿弥陀如来立像 大念寺

類が一致し、いずれも源信に関わることから、ともに源信が比叡山横川戒心谷に造立した地藏菩薩像を祖形とすることを指摘した。その後、ケルン美術館像と細部にいたるまで特徴が一致する京都・金剛心院像⁵⁶（12世紀）（図 18）や同・醍醐寺像⁵⁷（12世紀）が見出され、これらは造形においても原像を忠実に写したものである可能性が高まった。

上記は、いずれも造形が酷似する模刻の存在により、原像を写したと推察できる例である。一方、こうした忠実な模刻は前近代には少ないことから、一般的だったとは考えがたい⁵⁸。寂光院像が納入品で意識する傍ら、



図 17 地蔵菩薩立像 ケルン美術館



図 18 地蔵菩薩立像 金剛心院

造形において他の模刻とさほどの類似が認められないという点においては、他にもこうした造形の忠実さを重視しない模刻が伝存することを想起させる。

そうした点で、天台系薬師に近いと思われるのは、比叡山横川中堂本尊の観音菩薩立像⁵⁹（仁安4年〈1169〉以降）（図19）である。仁安4年の火災後に再興されたとみられる現本尊像は、左手に未敷蓮華を持ち、右手をこれに添える観音立像で、檀像風の素地仕上げとする他に、外見上これといった特徴はなく、造形的に忠実な模刻は見出されていない。しかし、



図19 観音菩薩立像 延暦寺



図20 観音菩薩立像 洞寿院

同形で檀像風の観音像は数多く、滋賀・洞寿院像⁶⁰（建保4年〈1216〉）（図20）など、なかには横川中堂本尊像を写した観音像もあろう⁶¹。これまで、明らかな模刻例が認められないためか、あまり注目されることがなかったものの、天台系薬師とは共通の性質があるように思われる。さらに、同じ横川中堂の観音・毘沙門天・不動明王という三尊の構成など、図像において特異な例もこれに含まれよう⁶²。

こうしてみれば、原像が広い信仰を得た場合、それほど造形に忠実ではない模刻も行われたように思われる。いいかえれば、原像に縛られないからこそ、自在に展開できたという側面もある。さまざまな造像機会がある

なかで、天台寺院の中心的な尊像となり得る薬師像や観音像が、ゆるやかに原像と関係をもつことは、厳格に外見上の特徴を守るより、むしろ重要だったのだろう⁶³。

(附記) 本稿は、筆者が慶應義塾大学大学院文学研究科に提出した博士論文「薬師如来の信仰と造形——天台宗における展開を中心に——」(2017年1月修了)の第2章第2節を大幅に加筆訂正したものです。主査の慶應義塾大学教授・林温先生、副査の慶應義塾大学名誉教授・故紺野敏文先生、文化庁主任文化財調査官・奥健夫先生(所属は当時)には、お忙しいなか懇篤な査読及びご助言を賜りました。また、本年ご定年を迎えられた林先生には、2004年のご着任以来、今日に至るまでご指導いただき、この場をお借りしまして深く御礼申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費(若手研究)「天台宗における仏像の模刻と信仰上の意義」(JP 20K12872)の助成を受けました。

注

- ¹ 奥健夫「六波羅蜜寺四天王像について」『MUSEUM』559, 1999年(のち『仏教彫像の制作と受容——平安時代を中心に——』中央公論美術出版, 2019年, 再録)。皿井舞「模刻の意味と機能—大安寺釈迦如来像を中心に」『京都大学文学部美学美術史学研究室研究紀要』22, 2001年。
- ² 根本中堂像の像容および製作背景に触れた先行研究は数多いため基礎研究として以下を挙げ、これ以外に重要な研究は個別に触れる。毛利久「元亀以前の延暦寺根本中堂と安置仏像」『国宝延暦寺根本中堂及重要文化財根本中堂回廊修理工事報告書』国宝延暦寺根本中堂修理事務所, 1955年(のち『日本仏像史研究』法蔵館, 1980年, 再録)。久野健「平安初期における延暦寺の仏像」『美術研究』260, 1969年(のち『平安初期彫刻史の研究』吉川弘文館, 1974年, 再録)。宇野茂樹「延暦寺の根本薬師像」『近江路の彫像』雄山閣出版, 1974年。清水善三「延暦寺における天台美術の展開」『延暦寺・園城寺と西教寺』(『日本古寺美術全集』10)集英社, 1980年(のち『仏教美術史の研究』中央公論美術出版, 1987年, 再録)。
- ³ 寺島典人「比叡山延暦寺における仏像、仏画安置状況の復元」『鹿島美術研究』

- 23, 2005 年.
- 4 西木政統「平安時代前期の薬師造像に関する研究」『鹿島美術財団年報』32, 2014 年. 旧稿刊行後の研究として, 下記を参照. 奥健夫「唐招提寺盧舎那仏像の腫と掌への特殊な工作について」『仏教彫像の制作と受容——平安時代を中心に——』中央公論美術出版, 2019 年. 眞田尊光「鑑真一行の薬師信仰と唐招提寺伝薬師如来立像」『鑑真と唐招提寺の研究』吉川弘文館, 2021 年.
- 5 奥健夫『清凉寺釈迦如来像』(『日本の美術』513) 至文堂, 2009 年(奥健夫氏, 注 1 前掲書に再録). また, 奥氏は最澄の自造伝説を背景に鑿痕が表わされた例として, 新潟・寛益寺薬師如来立像(11 世紀)を挙げておられる. 奥健夫「「如法」の造仏について」『日本仏教総合研究』15, 2017 年(のち, 注 1 前掲書, 再録).
- 6 『類聚三代格』(新訂増補『国史大系』) 前篇, 73 頁)
- 7 『群書類従』24, 590 頁.
- 8 『三宝絵集成』笠間書院, 1980 年, 230 頁.
- 9 『大正新脩大藏経』(以下, 『大正藏』) 74, 649 頁.
- 10 高木豊「天台宗の造型活動をめぐって」『仏教芸術』172, 1987 年. 井上大樹「平安時代中・後期における薬師如来信仰とその造像に関する研究」『鹿島美術研究』25, 2007 年.
- 11 紺野敏文「平安彫刻の成立 10」『仏教芸術』225, 1996 年(のち『日本彫刻史の視座』中央公論美術出版, 2004 年, 再録). 長岡龍作「神護寺薬師如来像の位相—平安時代初期の山と薬師」『美術研究』359, 1994 年.
- 12 奥健夫「清凉寺・寂光院の地藏菩薩像と「五境の良薬」——像内納入品論のために」『仏教芸術』234, 1997 年(奥健夫氏, 注 1 前掲書に再録).
- 13 恵鎮による記録として, 『根本中堂本尊事』(史料⑩)が知られるが, 印相には言及しない.
- 14 毛利久氏, 注 2 前掲論文.
- 15 津田徹英「書写山円教寺根本堂伝来 滋賀・舎那院蔵 薬師如来坐像をめぐって」『仏教芸術』250, 2000 年(のち『平安密教彫刻論』中央公論美術出版, 2016 年, 再録).
- 16 井上一稔「京都大原野・勝持寺本尊薬師如来坐像考——慈円・薬師行法との関係——」『仏教芸術』331, 2013 年.
- 17 林温「文化庁保管釈迦如来像—いわゆる如来鉢印像をめぐって—」『仏教芸術』247, 1999 年.
- 18 井上一稔氏, 注 16 前掲論文, 54 頁.
- 19 井上一稔氏は「慈円が判断した根本中堂薬師如来の印・初門釈迦印は, 先述した智吉祥印と捉えられる」という. 井上一稔氏, 注 16 前掲論文, 注 68.
- 20 津田徹英「延暦寺根本中堂安置の薬師如来像の尊容をめぐる覚書——無動寺

- 蔵・叡山文庫保管「山門根本中堂本尊」の翻刻によせて——』『パラゴネ』5, 青山学院大学比較芸術学会, 2018年.
- 21 安恵については, 岡野浩二『平安時代の国家と寺院』塙書房, 2009年を参照. 大伴国道については, 佐藤全敏『平安時代の天皇と官僚制』東京大学出版会, 2008年を参照.
- 22 清水擴氏は, これらとは別に客仏が二軀あったとする. 同「平安時代の延暦寺一乗止観院とその安置仏」『建築史学』44, 2005年(のち『延暦寺の建築史的研究』中央公論美術出版, 2009年, 再録).
- 23 以前, 滋賀・鶏足寺像について取りあげた際, 薬壺を持っていても施無畏・与願印と認識された可能性を指摘した. 西木政統「滋賀・鶏足寺の天台系七仏薬師如来像」『MUSEUM』668, 2017年.
- 24 毛利久氏, 注2前掲論文.
- 25 津田徹英氏は, 施無畏・与願印と伝える忠快が「中堂薬師」とし, 本尊とは明言しない点に注目されている. 津田徹英氏, 注20前掲論文.
- 26 松浦正昭「天台薬師像の成立と展開」『美術史学』15, 東北大学, 1994年.
- 27 奥健夫氏, 注5前掲書.
- 28 現在の釈迦堂本尊は清凉寺式釈迦如来立像(13世紀)である. 元亀の法難後, 天正13年(1585)に滋賀・高島から求めたと伝えられるものの, 当初像は坐像であり, 再興像に清凉寺式の立像が求められた理由は知られない. 旧本尊が坐像であったことについては, 『阿婆縛抄』所引『諸寺略記』下に「釈迦堂. 半金色釈迦仏像一軀を安置し奉る(居高三尺. 根本大師御願)」とある(『大正蔵』図像篇9, 769頁). 『叡岳要記』もまたほぼ同文を引く(『群書類従』24, 541頁). 移座について, 『天台座主記』には「十二月廿八日正教坊詮舜は転法輪堂の本尊を江州高嶋郡水尾村に迎え」とある(『天台座主記』校訂増補, 第一書房, 1973年, 478頁). 高島には古くから天台寺院が多く, 15世紀以降は延暦寺の荘園支配が及んでいた. 高島町編『高島町史』高島町, 1983年.
- 29 津田徹英氏, 注15前掲論文. 井上一稔氏, 注16前掲論文.
- 30 『扶桑略記』(新訂増補『国史大系』)300頁.
- 31 『群書類従』24, 478頁.
- 32 他, 同時代で大きさが異なり, 薬壺を持つなどの特徴を有する模刻については, 伊東史朗「祇園社日本地観慶寺薬師如来像について——覚助・長勢時代の研究——」『国華』1132, 1990年(のち『平安時代彫刻史の研究』名古屋大学出版会, 2000年, 再録)参照.
- 33 毛利久「室生寺金堂伝釈迦如来像の性格」『史窓』20, 京都女子大学, 1962年(のち『日本仏教彫刻史の研究』法蔵館, 1970年, 再録).
- 34 異論もあり, 近年では津田徹英氏が興福寺別院として室生寺の性格を重視し, 室生窟穴神への祈雨を願うための仁王経本尊である釈迦如来として製作された

- 可能性を指摘した。津田徹英「室生寺金堂本尊私見」『平安密教彫刻論』中央公論美術出版、2016年。
- 35 西木政統「室生寺金堂薬師如来立像と天台系薬師如来」『日本橋学館大学紀要』13, 2014年。
- 36 東京都教育庁生涯学習部文化課編『寛永寺及び子院所蔵文化財総合調査報告』3, 彫刻・工芸品編, 東京都教育庁生涯学習部文化課, 2002年。
- 37 なお、伊東史朗氏が寛永寺像と一具をなす可能性が高い僧形立像を紹介された。ただし、一尊を欠く三尊なのか、現存する二尊の組み合わせなのか判然としない。伊東史朗「〔作品紹介〕石津寺伝来の地藏菩薩立像」『仏教芸術』297, 2008年。同じく、善水寺諸尊と一具になる滋賀・永昌寺の地藏菩薩立像について論じた高梨純次氏は、『伝述一心戒文』に根本中堂像と並んで見える「比叡大神」である可能性を指摘した。薬師像と僧形像の関係についてもさらなる検討が必要である。高梨純次「甲賀市・永昌寺木造地藏菩薩立像について——天台系僧形像についての一試論——」『滋賀県立近代美術館研究紀要』7, 2008年（のち『近江の古像』思文閣出版, 2014年, 再録）。
- 38 清水善三「長源寺薬師像について」『仏教芸術』101, 1975年（のち『平安彫刻史の研究』中央公論美術出版, 1996年, 再録）。
- 39 清水善三「平安前期における延暦寺の彫刻」『仏教芸術』172, 1987年（のち注38前掲書, 再録）。
- 40 高梨純次「滋賀・金居原薬師堂木造薬師如来立像再論—平安中期における延暦寺根本中堂本尊像の「形」の認識についての試論—」『美術史論叢 造形と文化』雄山閣, 2000年（のち注37前掲書, 再録）。
- 41 ただし、浅湫毅氏は①「地髪部と肉髻の境があいまいでなだらかに続き」、②「額が狭く」、③「股間にはY字状の衣文を刻む」、④「朱衣衣体にならうものもある」という造形が規定として機能すると捉える（さらに⑤「坐像でも上記の特徴を示すものを広い意味で天台薬師と呼ぶ」という）。浅湫毅「伝統の継承——最澄自刻の薬師と円仁請来の阿弥陀」展覧会図録『最澄と天台の国宝』読売新聞社, 2005年。
- 42 『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇 16, 中央公論美術出版, 2020年。
- 43 西川杏太郎「法界寺薬師如来像考」『MUSEUM』162, 1964年（のち『日本彫刻史論叢』中央公論美術出版, 2000年, 再録）。
- 44 西木政統「鎌倉時代の特異な薬師立像と一日造立仏との関わりについて」『哲学』132, 三田哲学会, 2014年。
- 45 宇野茂樹「近江国善水寺の諸尊」『滋賀県立琵琶湖文化館研究紀要』4, 1986年。
- 46 津田徹英氏, 注15前掲論文。
- 47 濱田隆「立像阿弥陀来迎図成立史考——仏座像から仏立像へ——」『仏教芸術』

126, 1979 年.

- 48 『妙法蓮華經文句』には、「若当堂仏必須坐。消息仏或坐或臥。行動仏必応立」とあり、仏の姿勢を規定する。『大正藏』34, 57 頁.
- 49 調査対象となった 3283 件のうち、1158 件が阿弥陀如来、540 件が観音菩薩、そして 370 件が薬師如来である。吉山亮薫「現在仏像の分布と地方教線の特徴」『天台美術史序説』教育新潮社、1967 年.
- 50 『京都社寺調査報告』V, 京都国立博物館, 1985 年. 井上一稔「真正極楽寺(真如堂)《阿弥陀如来立像》をめぐって」『美術フォーラム 21』15, 2007 年, など.
- 51 『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇 6, 中央公論美術出版, 2008 年.
- 52 奥健夫氏, 注 12 前掲論文. 同「源信造立の地藏菩薩像に関する新資料」『仏教芸術』269, 2003 年(奥健夫氏, 注 1 前掲書, 再録).
- 53 『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇 3, 中央公論美術出版, 2005 年.
- 54 『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇 4, 中央公論美術出版, 2006 年.
- 55 『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇 6, 中央公論美術出版, 2008 年.
- 56 奥健夫氏, 注 52 前掲論文の他, 『京都の文化財』33, 京都府教育委員会, 2015 年. 中野慎之「金剛心院(宮津市)木造地藏菩薩立像 一躯」(京都府指定文化財の紹介〈表紙解説〉)『文化財レポート』29, 京都文化財団, 2016 年. なお、清凉寺像などに類似する納入品の存在は京都府による指定調査にともなって東京文化財研究所で行われた X 線撮影で判明していたが、のちに京都国立博物館で X 線 CT 撮影が実施され、その詳細が明らかとなった。浅湫毅・池田素子「宮津市・金剛心院の地藏菩薩立像と佛性寺の阿弥陀如来立像」『学業』39, 京都国立博物館, 2017 年.
- 57 奥健夫氏注 52 前掲論文の他, 副島弘道編『醍醐寺の仏像』2, 勉誠出版, 2019 年.
- 58 智証大師円珍が感得したと伝える滋賀・園城寺の不動明王像(黄不動尊)は、絵画・彫刻を問わず数多くの模写・模造が確認されている。ところが、基本となる造形に改変がほとんどみられない点では、むしろ日本における模写・模造全般にあっては特異な存在といってもよいのではないか.
- 59 井上正「横川中堂の聖観音像」(京畿仏像抄 12)『日本美術工芸』423, 1973 年など.
- 60 『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇 3, 中央公論美術出版, 2005 年.
- 61 奥健夫氏も、洞寿院像の他に滋賀・仏心寺像(貞応元年〈1222〉, 経円作), 同・芦浦観音寺像(建暦 3 年〈1213〉)を挙げて、いずれも横川中堂本尊像が「プロトタイプ」であると指摘する。同「[如法]の造仏について」, 注 5 前掲書. また、高梨純次氏が仏心寺像について論じるなかで「比叡山横川中堂の本尊と極めて近い」とされたのをはじめ、その形式の類似を指摘する見解は多い。高梨純次「滋賀・仏心寺木造聖観音菩薩立像について」『MUSEUM』399, 1984 年, 39 頁.

⁶² 天台宗に特有の尊像については、以下参照。伊東史朗「巨大なる手と時の技を謳う＝彫刻篇」『比叡山開創一千二百年記念史鑑〈傳燈〉最澄と叡山』比叡山開創一千二百年記念写真集刊行会、1988年。

⁶³ 津田徹英氏も、近年同様の指摘をしている。津田徹英氏、注20前掲論文。

図版出典

- 図1：『密教大辞典』法藏館、1983年。
図2：『日本古寺美術全集』9、集英社、1981年。
図3・13：『日本彫刻史基礎資料集成』平安時代造像銘記篇1、中央公論美術出版、1966年。
図4：『大和古寺大観』6、岩波書店、1976年。
図5：『大津の文化財』大津市教育委員会、1998年。
図6：『千葉市の仏像』千葉市教育委員会社会教育部文化課、1992年。
図7：『新編名宝日本の美術』8、小学館、1992年。
図8：『寛永寺及び子院所蔵文化財総合調査報告』3、東京都教育庁生涯学習部文化課、2002年。
図9：特別展図録『藤原道長』京都国立博物館、2007年。
図10：『日本の仏像大百科』1、ぎょうせい、1990年。
図11：『日本彫刻史基礎資料集成』平安時代重要作品篇2、中央公論美術出版、1976年。
図12：『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇16、中央公論美術出版、2020年。
図14：『日本彫刻史基礎資料集成』平安時代重要作品篇5、中央公論美術出版、1997年。
図15：『京都社寺調査報告』V、京都国立博物館、1985年。
図16：特別展図録『法然と親鸞』NHK・NHKプロモーション・朝日新聞社、2011年。
図17：『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇6、中央公論美術出版、2008年。
図18：『京都の文化財』33、京都府教育委員会、2015年。
図19：特別展図録『最澄と天台の国宝』読売新聞社、2005年。
図20：『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇3、中央公論美術出版、2005年。

史料編

頻出する史料は下記にまとめて提示する⁶⁴。

注

- 64 各史料の成立年代については、清水擴「史料批判」、注 22 前掲書、参照。なお、旧字は新字に、割注は〈 〉で表わした。関連する仏像の名称は大宇とし、該当箇所に傍線を付す。
- 65 『大正蔵』 図像篇, 4, 412 頁.
- 66 『大正蔵』 図像篇, 4, 435 頁.
- 67 『大正蔵』 図像篇, 8, 305 頁.
- 68 『大正蔵』 76, 852 頁.
- 69 『続天台宗全書』 密教三經典註釈類Ⅱ, 360 頁.
- 70 注 69 前掲書.
- 71 『群書類従』 24, 468~9 頁.
- 72 『大正蔵』 図像篇, 9, 763 頁.
- 73 『群書類従』 24, 509~10 頁.
- 74 『大正蔵』 76, 851 頁.
- 75 津田徹英氏, 注 20 前掲論文, 68~9 頁.
- 76 『群書類従』 24, 570~1 頁.

(1) 文献に伝えられる根本中堂像の姿

史料①覚禅(1143~?)『覚禅鈔』薬師(安元2年~建暦3年(1176~1213)ごろ)

恵什云(中略)中堂薬師。揚右掌垂左掌此仏也(云々)⁶⁵

(中略)

理性房法眼(賢覚云)中堂薬師立像(左手与願。右手施無畏)

又勝定房阿闍梨口伝云。古京像。右施無畏。左与願。不持壺⁶⁶

史料②承澄(1205~1282)『阿婆縛抄』薬師本(仁治元年~建治元年(1240~75)ごろ)

第三形像事

一。施願無畏(通仏相)是拔苦与楽義也

秘説云。中堂薬師施願無畏也。忠師親奉見之

実相院後朱雀院御願也。梨下座主明快(于時御持僧)沙汰奉写中堂本仏師円融房行事也。件仏本不持宝珠。人々謗難之間。後令持之(云々)

東寺金堂。並南京薬師寺像。揚右手垂左手。以左足押右脛坐(云々)或云和州室生薬師仏像同之(云々)⁶⁷

史料③光宗（1276～1350）『溪嵐拾葉集』（応長元年～貞和4年〈1311～48〉ごろ）

仏像安置事 私苗

一、根本中堂、中堂智吉祥印相事 相伝云、左手ヲ仰テ掌中ヲ凹テ横ニ胸上ニ置之也、右手ヲ大指捻中指辺ヲ、少深ク違タル也、右手ヲ左印ノ掌ニ相近ヅケタル事五六寸許也、如梵医印ノ也、此即チ智吉祥印也、報身説法印也、釈迦靈山聴法ノ灌頂、秘法中ノ智吉祥ト云此事也〈云云〉

口云、此事者元弘比、法勝寺上人為勅使拝見相也、諸門跡智吉祥印許相承セラル、事有之、屈而印相持様ヲハ不知及也、此印相事不可口外誠有之〈云云〉又云、

南谷南陽房幡州堅者、中堂欲炎上時拝見相少モ不違、甚深之旁符合了或一説曰、与願施無畏印ニテ、忍願少屈スト云ヘリ、

此相如何 示云、御厨子外戸帳内左右二尊有之、其仏印相也、是別仏也、此事本仏ヲ不拝見者歟、不便之誓在之、不可口外者也⁶⁸

史料④慈円（1155～1225）口伝（慈賢筆）『四帖秘決』（建保年間〈1213～19〉）

拝見スルニ中堂ノ本尊ヲ奇異ノ事アリ、見ルニ印相ヲ初門釈迦ノ印也

右御手ハ以大指ヲ中指ノ甲ノソハラ捻シテ小指水指頭指立之タリ、左御手ハ只御袖ヨリ指出シテ、臂ヲ身ニ付テ掌ヲ仰テ五指ヲノヘテ〈但稍屈之〉ユヒノサキヲ直ニ前ノ方ヘ向タリ、初門ノ印ハ、左手ハ横ニ置ク心ニ、是ハ不而、只指シ出タルママニテ指ヲノヘタリ

右ノ御手ハ、事外ニ上アケテ肩ニヒトシ、御身金色衣文綵色也、等身ノ立像也、見ルニ印相ヲ已是釈迦仏也、以之奉号薬師ト事、実ニ大師ノ素意深甚深甚也⁶⁹

(2) 根本中堂に安置された仏像

史料⑤『四帖秘決』（詳細は史料④）

拝見スルニ中堂ノ本尊ヲ奇異ノ事アリ、見ルニ印相ヲ初門釈迦ノ印也（中略）

御身金色衣文綵色也、等身ノ立像也。（中略）

又、等身像一体立給ヘリ、其ハ常ノ与願施無畏ノ印也、又身長二尺許ノ七仏同立像也〈云々〉、件七仏ハ於内陣ノ南床上ニ、仏師觀円並小仏師〈慶順〉更沐浴着淨衣ヲ奉修理シ御光座等ヲ、御身ハ無破損事、慈賢參シテ其処、親拝見之、印相ハ右手ハ如本仏、左手ハ与願也、殊ニ指ノ末ヲ垂下シ給ヘリ、此七仏並今一体等身像、不知誰人所造イフコトヲ〈云々〉⁷⁰

史料⑥『山門堂舎記』（東塔分は鎌倉時代〈13世紀初頭〉ごろ）

根本中堂、〈初号比叡山寺、後称一乘止観院、亦曰中堂。〉

大別当義真、小別当真忠、上座薬芬、

寺主慈行、都維那円信、

延暦七年（戊辰）伝教大師建立者。伐虚空藏尾自倒之木。以本切自手彫刻**薬師仏像一軀**安置之。大師發誓願而祈利生。件像搖頭而諸濟衆如生仏。詎謂木像矣。

此堂元者三字各別。文殊堂。薬師堂。経蔵等也。薬師堂以在中故曰中堂。但彼経蔵。今大師堂也。

薬師仏木像二軀。〈立高各五尺五寸。並身押金。衣文綵色。〉

件像。一軀者伝教大師伐虚空藏尾自倒之木像也（矣。）一軀者座主惟首和尚所造（矣。）

同仏像七軀。〈立高各二尺。並壇像。本願主不知誰人。〉

已上九軀安置根本薬師堂。在馨一枚。〈広四寸五分。長一尺一分。〉

文殊師利菩薩像一軀。〈在壇下別座方床。居高二尺五寸。肉色。〉

（中略）

梵天帝釈四天王像。〈立高五尺。並壇像。忠仁公所造也。〉

十二神将像各一軀。〈立高三尺五寸。並綵色。〉

件像者。治安二年七月。入道大相国（道長。）造立之。同十一月廿四日。以大師供請僧百口供養也。導師永昭律師。

日光月光菩薩像各一軀。〈並立高五尺。〉

件像者。檢校閔白（頼通。宇治殿。）所造立也。永承七年十二月廿三日開眼供養。導師座主源心西明房⁷¹。

史料 ⑦承澄（1205～1282）『阿婆縛抄』所収「諸寺略記（下）」（建長 2 年（1250）ごろ）

根本一乘止観院（俗曰中堂伝教大師草創）

葺檜皮十一間堂（一字）東有孫庇

其中七間為薬師堂。安置**薬師仏像三軀**（並立高五尺五寸）右**一軀**伝教大師手自所造立也。身金色。衣文綵色等也。一**軀**伝灯大法師惟首和尚所造也。一**軀**或人願

薬師仏像七軀（立高二尺。並檀像）

右本願主不知誰人

梵天帝釈四大天王像一軀（立高五尺。並檀像）

右六天像忠仁公（良房）（傍注：白川殿。文徳摂政）所造立也

十二夜叉大将像一軀（立高三尺五寸。並綵色）

右寛仁入道（傍注：御堂也）大相国所造立也

日光菩薩像一軀

月光菩薩像一軀（並立高五尺。金色）

右二菩薩像。永承三年閔白（傍注：頼通。二条殿）左大臣所造立也

文殊聖僧像一軀（在瑠璃壇下。別坐方床。居高二尺五寸。肉色）⁷²

史料⑧『叡岳要記』（弘長元年〈1261〉ごろ）

根本一乗止観院。〈俗云中堂。〉

葺檜皮十一間堂一字。東有孫庇。其中七間為薬師堂。安置**薬師仏像**。〈立高五尺五寸。身金色。衣文綵色。伝教大師自造。依先大師遺言修禪大師自身金色衣文綵色云々。〉

延暦四年〈乙丑〉七月中旬。大師初登山結草庵為宿。生年十九。住山廿年。安置薬師像。〈此事載下大師一生記可勘之。〉

同薬師仏像一軀。〈高五尺。身金色。衣文綵色。〉

本願主延暦寺別当正三位行刑部卿兼武蔵守勲六等大伴宿祢国道。天台第四座主安恵和尚。有師檀契。且依先師最澄提戒。兼為天下大平。以靈木一月卅日之間。祈仏神三宝。着新浄衣尽心力手自所造立也。依国道之本願如最前大師。薬師形像安置内瑠璃壇畢。〈御帳内。〉

私云。今南方見于安恵座主本伝。

同薬師像一軀。〈高五尺三寸。身金色。衣文綵色。〉

本願主第六座主惟首和尚手自所造立也。安置瑠璃壇。

私云。今北方御帳内。

貞観元年。以遍昭僧正為導師。遂供養大会。見于座主略伝。

七仏薬師像七軀。〈各立高二尺。〉

資財帳云。七軀内一軀闕左手。一軀闕右手也。

不知本願主誰人〈云々。〉

或記云。智証大師十二箇条起請文在之。智証大師自造也。本安置前唐院。天台座主時移止観院内陣畢。第十座主增命和尚之時。先大師本尊同奉納帳中畢〈云々。〉

又西方院座主記云。慈恵大僧正云。件七仏薬師御身以大唐玄法寺法全阿闍梨身造三寸七仏薬師靈像。奉納智証大師七仏薬師像中。件日記納中堂内陣畢。〈已上。〉

大師一生記云。〈仁忠。〉三寸薬師像二軀。此中一軀為利益衆生。改山故被移他所畢。

私云。一軀日野法界寺薬師仏也。一軀梨本門跡〈云々。〉委注下西方院座主記同之〈云々。〉

梵天帝釈四天王像。〈各立高五尺。並壇像。〉

所謂四天王多聞天。〈毘沙門天。〉持国天。〈提頭頼〔吒〕天。〉增長天。〈毘樓勒叉天。〉広目天。〈毘留博叉天。〉

本願主撰政太政大臣藤原良房。〈忠仁公。〉

十二神將像。〈各立高三尺五寸。並綵色。〉

本願主関白准三后太政大臣道長。

口伝云。大和国男女子息十二人也。相配其数。為祈榮祿造。治安三年十一月十四日供養。座主院源。導師興福寺永昭僧都。説法甚妙。山徒感歎。座主脱横皮纏頭。後代之美談也〈云々。〉

日月光像。〈並立高五尺。金色。〉

願主関白左大臣頼通。〈永承三年。〉

文殊聖僧像一軀。〈在壇下別座方床。居高二尺五寸。肉色。〉

千手院阿闍梨大法師昌生依慈惠大和尚所命所造立也⁷³。

史料 ⑨『溪嵐拾葉集』(詳細は史料③)

一、根本一乘止観院 俗云中堂。檜皮葺十一間堂一字。東在孫庇。其中七間為藥師堂。安置**藥師像三軀**〈並高五尺五寸〉

一軀〈伝教大師御作。立。高五尺五寸。身金色。衣文採色。頭光五枚。身光七枚。金色身像打物間青色。御袈裟色赤色。裏青色。文蓮円也。御坐宝蓮花。宝蓮花者花間莊玉也〉

一軀〈依大師提戒)惟首和尚御作〈依延暦寺俗別当大納言国道本願。安恵和尚御作〉

一、七仏薬師小像事 中堂内陣御帳内各高二尺。御遺告云。以大唐玄法寺法全和尚自造三寸七仏薬師小像。奉納智証御作七仏薬師像中〈云云〉智証大師御遺言〈号智証大師十二箇条起請〉

一、法中堂薬師像智証大師自造事 予為天下泰平自造**七仏薬師**立高二尺仏像。受面受師奉慈覚大師。大師悦喜崇本尊安置前唐院。其改本尊奉居中堂内陣。門人必扶持之。長時之行法莫懈怠之耳

一、**日光月光二菩薩**事 宇治関白太政大臣藤原頼通願。立。高五尺。永承三年造立之。各立。高五尺。本願主。摂政太政大臣藤原良房〈忠仁公〉

一、**十二神将像**事 各立。高三尺五寸。並揀色。本願主。関白准三后太政大臣道長〈号御堂関白〉西方院座主院源僧正記云

寅

宮毘羅大将〈左手差目影。右手提鉞〉

卯 青色

伐折羅大将〈左手拔鉞。右手持太刀〉

辰 青色

迷企羅大将〈左手持鉞。右手持独古〉

巳 赤色

安底羅大将〈左手持斧。右手持三古〉

午 赤色

頗備羅大将〈左手下□印。右手持曲斧〉

未 赤色

珊瑚羅大将〈左手横舒。右肩劍ケタリ〉

申 赤色

因達羅大将〈右手持釵軛三古形。左手取ル鞘ヲ〉

酉 赤色

波夷羅大将〈左手横持独古。右手持赤索〉

戌 肉色

摩虎羅大将 〈右手持太刀、左手受持太刀峯〉

亥 赤色

眞達羅大将 〈左手拳肘拳、面向外、右手拳安腰〉

子 青色

招社羅大将 〈左手持三古、右手持劍〉

丑 赤色

毘羯羅大将 〈左手持弓、右手持箭〉

右十二神将頭光皆八輻輪共無本形文

一、**文殊聖僧像一軀** 〈居、高二尺五寸〉 肉色仰左右手持如意、右ニス如意頭ヲ、依慈惠大師御命、千手院阿闍梨昌生造之 已上中堂安置仏像 〈云云〉⁷⁴

史料 ⑩『根本中堂本尊事』（建武 2 年〈1336〉ごろ）

御本尊長五尺五寸、此外内陣**七仏薬師七鉢**

在之、長一尺七八寸許歟、皆以金色也、是法全和尚御作覚大師御相承 〈云々〉、又**薬師二鉢**在之、長自七仏薬師少大歟、是誰人ノ作ト不知之 〈云々〉、仍帳内薬師十鉢在之、此等之次次第惣不可及口外⁷⁵

史料 ⑪『九院仏閣抄』（永徳 3 年〈1383〉ごろ）

大寺、〈号一乘止観院、後賜延暦寺額、弘仁十四年嵯峨御代名根本中堂、即此寺也。〉安置仏像卅一軀、

本尊薬師木像一軀、〈立像、長五尺五寸、身金色、衣文緑色、伝教大師自手造也、帳中□□。〉

同像一軀、〈長五尺五寸、身金色、衣文緑色、帳外北方安之、俗別当参議伴宿祿国道願、大師檀越、安惠御作。〉

同像一軀、〈長五尺五寸、身金色、衣文緑色、帳外南方安之、惟首和尚造之、示云、帳外内異義口伝也。〉

同像七軀、〈立像、高二尺、置壇帳内安之、願主不分明。〉

日光菩薩像一軀、〈立高五尺、金色、永承三年、宇治関白左大臣頼通所造立也。〉

月光菩薩像一軀、〈同上。〉

十二神将像、〈立高各三尺五寸、並緑色、御堂関白道長所造立也。〉

梵王像帝釈像四天王像、〈立高五尺、已上六天像、関白太政大臣忠仁公所造也、或是元八部院安置、奉移中堂輦乘。〉

示云、峰寺兩寺被移事在之、則目錄重可沙汰也、此外衣寺薬師、悉旦寺薬師加三十二軀也、加比〔此歟〕文殊三十三鉢也、

師云、元四天王八部院ニ在ス、然而大師奉移中堂、并彼四天王内一鉢、先立入

中堂而間悉被移之。

文殊聖像一軀。〈坐方座。高二尺五寸。西谷昌生阿闍梨作也。千寿院二軀作内。

一軀横川中堂ニテ。第十八座主時燒了。〉

已上安置中堂七間也⁷⁶。